

なぜ鳥はさえずる？

キトウシの森では小鳥たちのさえずりが聞かれるようになりました。さえずっているのはほとんどの場合オスです。オスはこれから子育てをするために、メスとペアにならなくてはなりません。そのためにまず縄張りを確保します。その縄張りを主張する方法がさえずりなのです。まだまだ雪の残るころから、森の小鳥たちは子育てに向けての準備にとりかかっているのです。

さえずりはただ鳴いているだけではありません。声量があり、メロディーのレパートリーが多いオスが、より広い縄張りを獲得できます。声に力がなくワンパターンのオスはいつまでたっても縄張りを獲得できません。森に出かけて鳥のさえずりを聞く時には、上手な鳥か下手な鳥かを確かめてみるとおもしろいでしょう。

縄張りが広いと子育ての時に十分なエサを獲得できます。多くの鳥はペアになる時にメスが決定権を持っていますので、オスは選ばれるために広い縄張りを必死に確保するのです。そして広い縄張りを持っているオスから順番にペアになっていきます。ペ



Nature Column (ネーチャーコラム)
自然解説員などで活躍する人々をリレーしています。



シジユウカラのペア、右がメスで左がオス

アになってしまったら、もうさえずる必要はありません。こうして森は次第に静かになっていくのです。春、外を歩く時には少し耳を澄ましてみてください。そして必死に鳴いているオスの姿を想像してみてください。いつもより鳥たちが近くに感じられますよ。歩く場所は羽衣公園やキトウシ森林公園がお勧めです。春の訪れをぜひ耳で楽しんでください。

NPO法人ねおす・大雪山自然学校

コーディネーター

小林

峻



新連載

本で知るふるさとの山

山の文化史に魅せられて

東川町には大雪山に関する書籍がどのくらいあるのでしょうか。調べると文化交流館に約70冊、文化ギャラリーに約20冊、合わせて90冊ほど揃っています。

その中の一冊『大雪山文献書誌』は、大雪山の文献を網羅、解説した全四巻ものです。著者、清水敏一さんは岩見沢市在住で、ご自宅に『大雪山房』を掲げています。

第一巻一ページに清水さんの思いとして、「大雪山は北海道の名山、いや日本の名山である」「私にとっての大雪山は、登山もさることながらこの山の文化史(探検、調査、研究、開発、登山など)に大いに関心がある」と書いています。

取り上げた書籍、案内書、雑誌・部会報には第四巻まで通しナンバーがふってあり一五五にも上ります。大雪山に精通した第一人者です。昨年夏、詩人で童謡・民謡作詞家、野口雨情の孫野口不二子さん(茨城県北茨城市、野口雨情生家資料館代

清水敏一さん



大雪山概論:小泉秀雄著

表)が雨情が書いたはがきを持って旭岳温泉大雪山白樺荘にやってきました。

雨情と山にどんなかわりがあるのでしょうか。清水さんの著書『知られざる大雪山の画家・村田丹下』を読むと、雨情が黒岳石室に泊まったことなど足跡が詳細に分かります。

『羽衣の滝』の命名は文豪、大町桂月である。一時、通説となっていたが清水さんが誤りを指摘しました。最近も、中学三年生の副読本に『大雪山の父 小泉秀雄』を書くなど執筆活動を続けています。小泉が丹精込めて書いた精緻な植物図、この世に一冊しかない小泉手書きの貴重な原本を清水さんは保管しています。

多くの人が大雪山を訪れ、思い入れ深くさまざまな書物を残され、写真集やガイドブックに感動を記しています。そうした書物の幾つかを紹介していきます。

町史編さん専門員、西原義弘